

出典：『大和物語』 百五十五段 / 明治大学 商学部 81年

現代語訳

昔、大納言がたいそう美しい娘を持っていらっしやったが、(その娘を) 帝にさし上げようと思つて大切に育てていらっしやったところ、(大納言) 殿の(おそば) 近くお仕えしていた内舎人であつた人が、どのようにして見たのであろうか、この娘を見たのだった。(娘の) 容貌・容姿がたいそう美しい様子であるのを(男は) 見て、(他の) すべてのことが考えられず、(娘のことが) 心にかかつて、夜も昼もたいそう辛く苦しくて、病氣になりそうに思われたので、(娘に) 「ぜひとも(あなたに) 申し上げなければならぬことがあります」と言い続けたところ、(娘は) 「変ですね。何事ですか」と言つて(外へ) 出たところ、(男は) その(女を盗み出そうという) ような心づもりをして、不意に(娘を) 抱いて馬に乗せて、陸奥の国へ、夜も昼も休みなく逃げて行つた。安積郡の安積山という所に(男は) 庵を作つてこの女を住まわせて、度々里に出て食物などを求めてきては(女に) 食べさせて、年月を経て過ごしていた。この男が(里に) 出かけると、(女は) たつた一人何も食べずに山の中にいたので、この上なく心細かつた。こうしているうちに(女は) 身ごもつてしまつた。(ある日) この男は、食物を求めに出かけてしまつたまま、三、四日帰つて来なかつたので、(女は) 待ちくたびれて、(外に) 出て、山の井(＝山中のわき水がたまつているところ) に行つて、(自分の) 姿を(映して) 見ると、自分の以前の容貌でもなく、(見慣れぬ) 見苦しい様子になつてしまつていたので、鏡もないので、(女は自分の) 顔がどのようになったかも知らないでいたが、突然に見ると、たいそう恐ろしい様子であつたので、とても恥ずかしいと思つた。そこで(女が) 詠んだ(歌は)、

あさかやま……安積山の姿までもが(映つて) 見える山の井が浅いように、浅い心で(私は) あなたを思つていたことでしょうか、
いいえそのようなことはありません(あなたを深く愛していました)

と(女は) 詠んで、(その歌を) 木に書き付けて、庵に戻つてきて死んだのだった。男は、食物などを求めて持つてきたが、(女が) 死

んで横たわっていたので、たいそう意外で瞠かわしいことと思った。(男は)山の井にあった(女の)歌を見て(庵に)帰ってきて、この(女の歌の)ことを思いつめて、(女の)そばに横たわって死んでしまった。(これは)世間に伝わる昔話であった。

解答

問1 (a)〓ウ (b)〓イ (c)〓ウ (d)〓ア

問2 大納言 (本文1行目)

問3 ぜび、あなたに申し上げなければならないことがある

問4 大納言の娘をさらおうとした。〔14字・解答例〕

問5 顔容貌のいとうつくしげなる〔13字〕(本文2～3行目)

問6 自分は男のことを本当に深く愛していた。〔19字・解答例〕

問7 (ウ)

特別問題

鏡もないので、女は自分の顔がどのようなになったかも知らないでしたが

現代語訳

昔、大和の国、葛城の郡に住む男と女がいた。この女は、容貌・容姿がたいそう美しい。(男と女は) 長年の間、互いに愛しあって住んでいたが、この女が、たいそう(生活状態が) 良くない状態になってしまったので、(男は) 思い悩んで、(この女のことを) この上なく愛しく思いながらも、(他の女を、第二の) 妻にしてしまった。この新しい妻は、裕福な女であった。(男はこの第二の妻を) 格別に愛しく思っているわけではないけれど、(男が) 行くと(第二の妻は) たいそう気を遣って世話をしてくれ、身に付ける衣服もたいそうきれいにさせたのだった。(男は) このように富み栄えている所に(通い) 馴れて、(たまにもとの妻の所へ) やって来ると、この女は、たいそうみすばらしい様子で暮らしていて、(男が) このようにほか(の女の所) に出かけるけれど、まったく妬ましそうにも見えなかつたりなどするので、(男はもとの妻を) たいそうしみじみと気の毒に思った。(もとの妻は) 心の中ではこの上なく妬ましく辛く思うが、我慢しているのであった。(男がもとの妻の所に) 泊まろうと思う夜も、やはり「(新しい妻のところへ) 行きなさい」と(もとの妻は) 言ったので、(男は) 自分がこのように(ほかの女の所へ) 通うのを妬ましく思わないで、浮気をしているのである。そのようなこと(「浮気」をしないならば、(自分を) 恨むことが必ずあるだろうなどと、心の中で思ったのだった。そして、(男は) 出て行くと見せかけて、庭の植え込みの中に隠れて、(浮気相手の) 男が来るかと思っただけで、(もとの妻は) 縁側に出て座って、月が非常にたいそう美しく出ているもとの妻と、髪をとかしなどしている。(もとの妻は) 夜が更けるまで寝ないで、たいそうひどくため息をついて物思いにふけりながら見るともなしに(外を) 見ていたので、「(浮気相手の) 男を待っているのであるようだ」と(男が思っただけで) 見ていると、(もとの妻は) 召使で(目の) 前にいた人に言った。

風吹けば……風が吹くと沖の白波が立つという龍田山、盗賊が出るといふ恐ろしい龍田山を、夜中にあなたは一人で越えているのだらうか(あなたがどうか無事でありますように)

と詠んだので、(もとの妻は) 自分の身の上を思っただけで、(男は) たいそう(もとの妻が) いとしくなった。この新しい妻の家は、龍田山を越えて行く道(の途中) にあったのだった。(男が) このようにしてなおも見ていると、この女は、泣

き伏して、金鏡に水を入れて、胸に当てた。不思議だ、どうするのだろうかと思って、(男は) なおも見る。すると、この水が熱湯に(なって) 煮え立ったので、(その) 湯を捨てた。(もとの妻は) また水を入れる。(男は) 見ていると、たいそういとしくて、(思わず) 走り出して、「どのようなお気持ちでいらっしゃるので、このようになさるのですか」と言つて、(もとの妻を) 抱き抱えて寝てしまつた。こうして(男は) ほか(の女の所) へもまったく行かずに、じつと(もとの妻の所に) 居着いたのだった。こうして月日が多く経つて(男が新しい妻に) 思いを馳せたことには、何げない顔であるけれど(「さりげないふりをしていなければならないけれど」、女が(心の中で) 思うことは、たいそう激しいものであったのだから、(新しい妻も) このように(自分が) 行かないのをどのように思っているだろうと思ひ出して、例の新しい妻の所へ行つた。長い間行かなかつたので(男は) 気が引けて(外に) 立っていた。そして透間からのぞくと、(以前は) 自分には(新しい妻は) 美しく上品に見えたけれど、(今は) たいそうみすばらしい様子の着物を着て、大きい櫛を前髪にさして(下賤な様子をして) いて、自分の手で飯を(茶碗に) 盛っていた。(男は) たいそうがっかりだと思つて、帰つてきたまま、(新しい妻の所へは二度と) 行かなくなつてしまつた。この男は皇族であつたのだった。

解答

問1 (a) ㊦ (b) ㊦ (c) ㊦ (d) ㊦

問2 ① ㊦ (ア) ↓ イ ② ㊦ (ア) ↓ ウ ③ ㊦ (ア) ↓ イ ④ ㊦ (ア) ↓ ウ

問3 (1) ㊦ この女が、たいそう貧しい状態になつてしまつたので、男は思い悩んで、

(2) ㊦ もとの妻が、たいそうひどくため息をついて物思いにふけりながらぼんやり外を見ていたので、〔いずれも解答例〕

問4 かぎりなくねたく心憂く〔11字〕(本文5行目)

問1 「いみじ」の意味を文脈によって区別する問題。「いみじ」は、シク活用の形容詞で、動詞「いむ(忌)」と関係が深い。神聖、不浄、穢けがれているので決して触れてはならないと感じられる意がもとで、転じてきわめて甚だしい意となる。神事の前に身を清め、けがれを避ける「忌み」の形容詞化したものと考えられるが、上代(＝大和・奈良時代)の文献にはなく、中古(＝平安時代)の和文に多く見られる。漢文訓読体の文章や軍記物語において、程度の甚だしい意としては「はなはだ」・「きはめて」が用いられる。また、「忌み」を語源とする「いみじ」と、神聖の意味を表す「齋い」を重ねた「ゆゆし」には共通した性格もみられる。ともに「触れてはならない・避けるべきだ」という意味から、良くも悪くも程度が並々でないようすを表すようになった点である。ただし、「いみじ」が「程度が並々でない」意味で用いられることが多いのに対し、「ゆゆし」は本来の意味である「恐れ多い・不吉である」という意味の方が多用される点が異なる。

さて、「いみじ」の語義と用法について整理しよう。語義は「良くも悪くも程度が極端な様子」。そこから副詞的用法として連用形(「いみじく・いみじう」の形)で、並々でなく、たいそう、ひどく、非常に、とても、などと訳出されるものが出てくる。この場合、被修飾語にあたる言葉を省略した用法も多いので、その際文脈から適当な訳語を補って解釈しなければならぬ。

次に、良い面の意味が強調された用法として、優れている、すばらしい、みことだ、などと訳出される場合をあげておく。〔『更級日記』・物語〕の一節、「源氏物語の文章が空で思い浮かぶを自分でもいみじきことに思ふに、(＝すばらしいことと思うのだが)」。

最後に、悪い面の意味が強調された用法として、ひどい、恐ろしい、悲しい、かわいそうだ、がっかりだ、困った、などと訳出される場合をあげておく。〔『枕草子』・上うへにさぶらふ御猫は〕の一節、「あないみじ。犬を蔵人二人して打ちたまふ。死ぬべし。(＝まあひどい。犬を蔵人が二人でお打ちになる。死ぬにちがいない)」。以上のようにまとめられるだろう。

選択肢の方へ目を転じてみると、副詞的用法の「ひどく」や「とても」は単独で用いられるはおらず、(ア)「ひどく激しい」、(イ)「とても念入りだ」、のように実意を補ってある。良い面が強調された用法は、(オ)「すばらしい」。悪い面が強調された用法は、(ウ)「かわいそうだ」、(エ)「がっかりだ」、と分類・分析することができるだろう。

傍線部(a)から具体的に解いてゆこう。(a)の場合は、「(男が)殊ことに思はねど、(男が)いけば(女は男を)いみじういたはり、……」であるので、副詞的用法。また、「いたはる(旁)」が、「(大切に)世話をする」という意味からも(イ)との相性が最も良いこ

とがわかる。次に(b)の場合は連用形だが、「月のいとみじうおもしろきに」に(ア)はあてはまらない。そこで副詞的用法と限定せずに意味の面から考えると(オ)「すばらしい」がぴったりである。(c)の場合は「女の思ふこと、いとみじきこと」とあるが、ここは「女というものは表面ではさりげないふうを装っていても心の中では……」と男が女性の本質というものを再認識した部分なので、内容本位に考えてゆくべき問題である。「つれなき顔なれど(＝表面ではさりげないふうを装っていても)」の裏返しは、次に来る内容は、と考えてほしい。(ア)「ひどく激しい」、これしかない。辞書の分類・用法説明を一応の一般的な型としておいて、あとは臨機応変、内容本位の解法を重視すべきであるということである。副詞的用法はあくまで「的用法」なのであって絶対化は危険と言わなければならない。(d)の場合は「われにはよくて見えしかど……手づから飯盛りをりける。」に続いて「(男) といみじと思ひて」である。「われにはよくて(＝以前自分には美しく)見えしかど」に続く文であるから、(エ)の「がっかりだ」となる。これも女の本質ということになるか。表面的には美しくてもその内実は正反対であるということも、この時男にとって深く認識した女の真実なのである。つくづく歌物語は「男と女の物語」であると思わずにはいられない。

問2

傍線部を含む文を明確にし、文(センテンス)として復元する問題である。設問文にあるような「誰の」「誰に対する(行為や感情)」なのかという問題は、述語動詞や形容詞に対する動作主体(行為・感情の主体)を明確にせよということであり、文脈を追ってゆけば答えにたどりつけるはずだ。

①「来たれば」は、前へたどれば本文2行目の「妻をまうけてけり」の主体と一致する。脚注にある「(他の女を)第二の妻とした」の主体は、当然のことながら「男」である。それが本文4行目「かく賑ははしき所にならひて(＝このように富み栄えている所に通い馴れて)」いたということになる。一方、後へ文脈をたどれば、「来たれば、この女、いとわろげにてゐて(＝このもとの妻は、たいそうみすばらしい様子で暮らしていて)」と続いていて、(ア)「男」が、(イ)「もとの妻」のもとへ「来たれば」であることがわかる。

②「往ね」はやや注意を要する。これは男が「留まりなむと思ふ夜も」もとの妻が男に「往ね」と言ったので、会話そのものは「もとの妻」から「男」へなのだが、ここで考えなくてはならないのは「往ぬ」という動作の主体が誰で、誰のところへ「往ね」ということなのか、なのである。その点に注意すれば、「往ね(＝行つてらっしゃい)」は、「男」が「第二の妻」のもとへ「往ぬ(＝行つてしまふ)」ことだと考えることができよう。

③「かなしく」は、「見るにいとかなしくて、走り出でて」とあるように、垣間見をして見ていて、走り出したのは男だから、(ア)「男」↓(イ)「もとの妻」に対する感情であることは比較的つかみやすいはずだ。

④「行かぬ」では、男が長い間もとの妻に寄り添って暮らし、第二の妻のもとへ行かないことが久しくなったことを読みとる。ポイントは本文15行目の「かくて月日多く経て思ひやるやう（＝思いを馳せた）」の内容で、「つれなき顔なれど……かく行かぬをいかに思ふらむと思ひ出でて（＝どう思っているだろう）」と男が考える部分。男のこの時の立場からすると、第二の妻のもとへ自分が「行かぬ」ことを、第二の妻は今ごろどう思っているだろう、ということになる。

問3

現代語訳の問題。現代語訳というのは単語の一つ一つを正確につかんだ上で文脈に合ったわかりやすい表現を工夫し、時には必要な言葉を補って訳文を作らねばならない。手順としては、まず品詞分解である。

(1) 「こ／の／女、／いと／悪く／なり／に／けれ／ば、／思ひわづらひ／て」と分解してみた。「悪く／なり（成る）」とはどういうことか。「悪し」の語義は「客観的に見て、普通よりは少し劣っていたり、悪かったりする様子」であり、文脈によって実質の意味は無数にあるといつてよい。では「何が」「わろし」なのか。そのヒントは本文2〜3行目の「この今の妻は、富みたる女」との対応にあるだろう。「この女が貧しくなった」と考えてはじめて男が第二の妻を設けた理由が了解される。男は自分の生活を支えるためにやむをえず経済力のある女性を別妻としたのである。「けれ／ば」は、助動詞「けり」の已然形＋接続助詞「ば」で原因や理由を表す。「ゝたので」と訳す。「思ひわづらふ」は、「思ふ」＋「わづらふ」の複合動詞。「煩ふ」はもともとと精神的に苦しむことを表し、病気で苦しむという意味は中古（平安時代）半ば以降にならないと出てこない。それに対して「悩む」は、肉体的に苦しむことを表すのがもともとの意味。いずれも派生して形容詞「煩はし」、「悩まし」を作るが、動詞本来の意をよく残している。訳出の際は「思ひわづらひて」の主体である「男」を補っておく。

(2) 「いと／いたう／うち嘆き／て／ながめ／けれ／ば」と分解できる。「いたう」は「甚し（＝並々でない、はなはだしい）」の意で、連用形「甚く」が音便となって副詞として固定したものである。「うち嘆き」の「うち」は単なる接頭語で実意はほとんどない。「ながむ」は重要古語。もともとは長時間物を見る意といわれるが、物思いにふける、あるいは物思いにふけりながらぼんやり見やる、と解釈される場合が多く、ここもその例。現代語訳を作る時は「うち嘆きてながめ」ている動作主体である「もとの妻が」を補って完成させよう。

問4 心情を具体的に述べた箇所を抜き出す問題。傍線部(3)「いかなる心ち」とは、男が、もとの妻の行動を観察していた時の妻の不

審な行動に対して発した言葉である。もとの妻は水の入った金鉢かなまりを胸に当て熱湯になると水を入れかえることをくり返す。これは女の激情の古代的な表現ではないだろうか。女の気持ちは傍線部(3)の前後に説明されてはいない。前半の本文5行目まで視野を広げると「心ちにはかぎりなくねたく心憂く思ふを」とあって、説明的に「忍ぶるになむありける（『我慢していたのだった。』と書かれている。「気持ち」を具体的に述べている部分に絞って十字程度という条件に合わせるならば、「かぎりなくねたく心憂く」

(11字)が導き出せる。